

『銭形平次捕物控』

野村胡堂

金色の處女

一

「平次、折入つての頼みだ。引受けてくれるか」
「へエ——」

銭形の平次は、相手の眞意を測り兼ねて、そつと顔を上げました。二十四、五の苦み走った好い男、藍微塵の狭い袷が膝小僧を押し隠して、彌造に馴れた手をソツと前に揃えます。

「一つ間違えば、御奉行朝倉石見守様は申すに及ばず、御老中方に取つても腹切り道具だ。押付けがましいが平次、命を投げ出すつもりでやって見てはくれまいか」

と言うのは、南町奉行與力の筆頭笹野新三郎、奉行朝倉石見守の智恵囊と言われた程の人物ですが、不思議に高貴な人品骨柄です。

「頼むも頼まないも御座いません。先代から御恩になった旦那様の大事とあれば、平次の命なんざ物の数でも御座いません。どうぞ御遠慮なく仰しやって下さいまし」

敷居の中へいざり入る平次、それをさし招くように

座布團ざぶとんを滑り落ちた新三郎は、

「上様うえさまには、又雑司ヶ谷ぞうしがやの御鷹狩おたかがりを仰せ出いだされた」

「エツ」

「先頃ぞうしがや、雑司ヶ谷御鷹狩おたかがりの節せつの騒さわぎは、お前も聞いたであろう」

「薄々は存じて居おります」

それは平次も聴きき知しって居おりました。三代將軍家しやうぐんいえ

光公みつこうが、雑司ヶ谷鬼子母神ぞうしがやきしもじんのあたりで御鷹おたかを放はなたれた

時とき、何處どこからともなく飛とんで來た一本の征矢そやが、危あう

く家光公けいこうの肩先かたさきをかすめ、三つ葉葵みつばあおいの定紋じやうもんを打うった

陣笠じんがさの裏金うらがねに滑すべって、眼前めまへ三步さんぽのところところに落おちたとい

う話わ。

それッ——と立ちどころてはいに手配てはいしましたが、曲者くせものの

行方は更にわかりません。
ゆくえ

後で調べて見ると、鷹の羽を矧いだ笹深の眞矢で、
しろみが たか は のぶか ほんや
白磨き二寸あまりの矢尻には、松前のアイヌが使うと
やじり まつまえ
言う『トリカブト』の毒が塗ってあったと言うこと
です。

「その曲者も召捕らぬうちに、上様には再度雑司ヶ谷
めしと さいどぞうしがや
の御鷹野を仰せ出された。御老中は申すに及ばず、お
おたかの おお いた かんげん
側の衆からもいろいろ諫言を申上げたが、上様日頃の
こゝまじょう いた
御氣性で、一旦仰せ出された上は金輪際變替は遊ば
こんりんさいへんがへ あそ
されぬ。そこで御老中方から、朝倉石見守様へ直々の
あさくらいわみのかみ
お頼みで、是が非でも御鷹野の當日までに、上様を
おたかの じつじ
遠矢にかけた曲者を探し出せとのお言葉だ。何んとか
とおや
良い工夫はあるまいか」
よ
一代の才子笹野新三郎も、思案に餘つて岡つ引風情
さいしさをのしんざぶろう あま おか びきふせい
の平次に縋り付いたのです。
すが

★テキストは、インターネット上の「青空文庫」のテキストをもとに
しています（一部加工しています）。

「青空文庫」<http://www.aozora.gr.jp/>